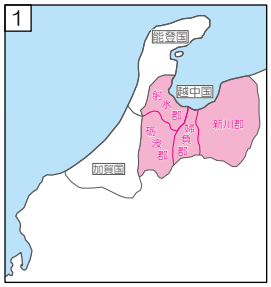
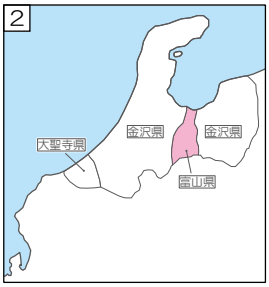
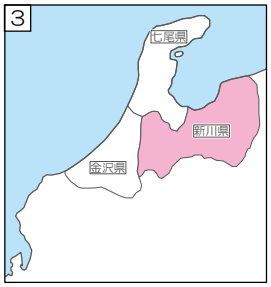
①越中の国の領域



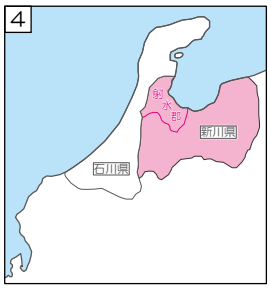
②廃藩置県直後
（明治４年７月14日）



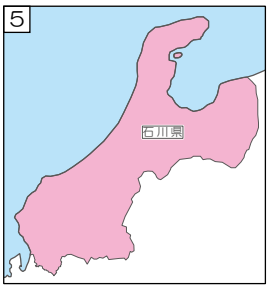
③新川県設置
（明治４年11月20日）



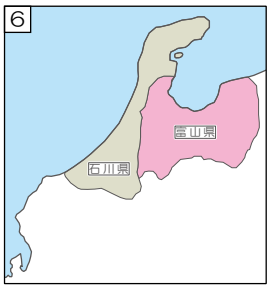
④射水郡編入
（明治５年９月27日）



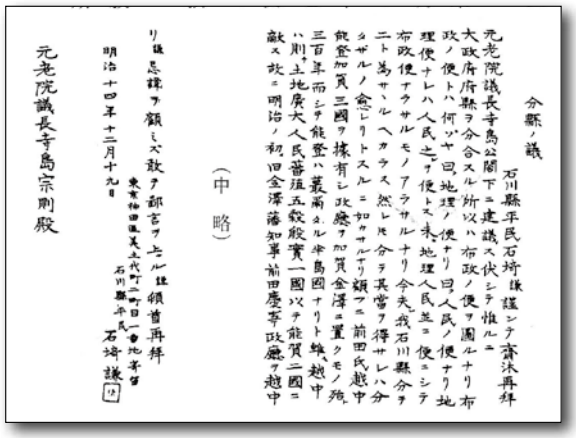
⑤新川県廃止
（明治９年４月18日）



⑥富山県設置
（明治16年５月９日）



富山県域の変遷



分縣ノ議

石川縣平民石埼謙謹ンテ齋沐再拜

元老院議長寺島公閣下ニ建議ス伏シテ惟ルニ大政府府縣ヲ分合スル所以ハ布政ノ便ヲ圖ルナリ布政ノ便トハ何ゾヤ曰ク地理ノ便ナリ曰ク人民ノ便ナリ地理便ナレハ人民之ヲ便トス未ダ地理人民共ニ便ニシテ布政便ナラサルモノアラサルナリ今夫我石川縣分ニト為サンヘカラス然レトモ分ツ其當ヲ得サレハ分タサルノ愈レリトスルニ如カサルナリ顧フニ前田氏越中能登加賀三國ヲ據有シ政務ヲ加賀金澤ニ置クモノ殆ト三百年而シテ能登ハ義爾タル半島國ナリト雖越中ハ則チ土地廣大人民蕃殖五穀殷實一國以テ能賀二國ニ敵ス故ニ明治ノ初田金澤藩知事前田慶寧政廢ヲ越中

（中略）

リ願忌諱ヲ顧ミス敢テ鄙言ヲ上ル仰願首再拜

東京麹町區麹町二丁目一番地寄留
明治十四年十二月十九日　石川縣平民　石埼謙

元老院議長寺島宗則殿

石埼謙の分県設立建白書

石埼謙の肖像画

7 近現代の砺波

富山県となる

当初、各県の区域や県名はめまぐるしく変更され、砺波郡は金沢県、新川県、石川県などに属しましたが、石埼謙（砺波市小島出身）が元老院に提出した**分県設立建白書**などにより、1883（明治16）年ようやく石川県から富山県が分かれて設置され、今日に至っています。

新しい学制

1872（明治５）年、新政府は学制を発布し、国民すべてに教育を受けさせることを目指して全国に小学校を設置しました。砺波市域でも右の表のように多くの小学校が設立されましたが、必要な経費はすべて地元負担とされたことや、子供たちは家の手伝いとして欠くことのできない存在だったので、子供を学校へ行かせたくない親も多くいました。とりわけ女子は、学問など不要だとの考えも根強く、当初の就学率は男子40パーセントに対し、女子は15パーセント程度であったそうです。

明治７年　小学校の設置状況

小学校名	所在地	設立年	教員数	児童数	
				男	女
節文	杉木新	明治６	4	197	24
格致（かくち）	矢木	明治６	2	113	－
中野	中野	明治６	2	75	9
琢成（たくせい）	五郎丸	明治６	1	92	10
苗加	苗加	明治６	2	90	2
野村島	野村島	明治６	2	45	－
鷹栖	鷹栖	明治６	2	134	4
至慎（ししん）	西中	明治６	2	99	5
中島	東中	明治７	3	125	2
有得（ゆうとく）	紺屋島	明治６	1	91	23
隆文（りゅうぶん）	江波	明治７	2	60	2
宮丸	宮丸	明治６	2	84	8
郁文（いくぶん）	太田	明治６	3	104	9
先進	頼成	明治６	2	92	－
栴檀	二島新	明治６	2	131	13
期功（きこう）	増山新	明治６	2	68	5
別所	別所	明治７	1	33	－
寺尾	寺尾	明治６	1	47	－
崇義（すうぎ）	高儀新	明治６	2	62	3
済有（さいゆう）	金屋岩黒	明治６	3	81	8
湯山	湯山	明治６	1	46	－
雄神	庄金剛寺	明治６	1	60	4

（『砺波教育八十年史』および『庄川町史』下巻より砺波市分を抽出）

地租改正と砺波農民騒動

地券

1873（明治6）年、地租改正条例が公布され、土地ごとに地価を定め、その100分の3を地租として、土地所有者が政府に金納することになりました。そのため、地券が発行され、土地の所有者が確定されたのです。

加賀藩では、「**田地割**」という制度で土地を交換していましたが、砺波地方は、全国的に見ると特殊な散村地域で、「田地割」が行われても、互いに田地を交換し合い、自分の家の周りに自分の耕地を集めることが行われていました。

そのため、地租改正により、そのときの当たりくじで所有者が特定され、地券に明記されると、長年耕作してきた土地の小作権も奪われる心配が出てきました。そこで1876（明治9）年には地券の中に小作人の名も書き入れることを要求する嘆願運動が起こりました。

翌1877（明治10）年には、地租が3％から2.5％に引き下げられましたが、この引き下げがさらに地主と小作の対立を激しいものとしました。地主側は、この減額は地主のものと主張し、小作農民側は、小作に与えられたものと主張したのです。

そこで、県側は農民を説得するために今石動（小矢部市石動）、杉木新町（砺波市出町）、戸出（高岡市）へ県の官吏を派遣して説明に回らせました。杉木新町では多数の農民が会場の真光寺を取り囲みましたが、暴力沙汰にはなりませんでした。しかし、翌日の会場である戸出の永安寺では、寺を取り囲んだ一部の農民たちが暴徒化し、地主の家々を打ち壊し、県側の官吏たちは命からがら逃げ出す騒ぎとなりました。そして翌日、金沢から軍隊が派遣され、騒ぎをようやく鎮めたのでした。この騒ぎは**砺波農民騒動**といわれています。

この結果、砺波地方の村々では、今まではっきりしていなかった「**慣行小作権**（かんこうこさくけん）」が確立されました。「慣行小作権」とは、土地の所有権はなくても、自分の家の周囲の土地を耕作する権利は小作自身が持っているという権利です。この権利は長い間、伝統的慣習として認められていたのですが、この農民騒動以後は法的にも保護されるようになりました。

戸出永安寺の柱の傷跡（高岡市戸出）

交通の発達

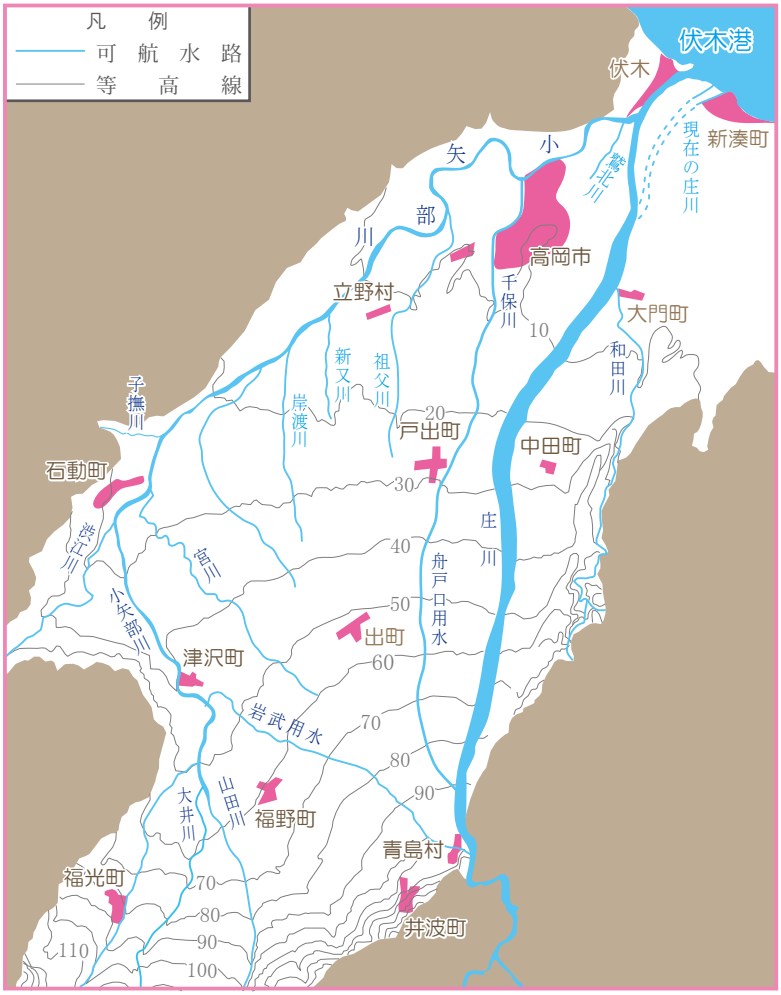
江戸時代までの物資の輸送は、重いものは河川や用水を利用した舟運に頼っていました。荷車もリヤカーもない時代は人や馬の背で運ぶより、舟の方が一度に多くのものを運ぶことができたからです。

砺波地方でとれた米も、川舟で運ばれました。中野・庄下を流れる舟戸口用水や鷹栖の宮川などが利用されました。小矢部川へ合流したあと伏木まで下り、そこで大きな船に積み替えられて、大阪や北海道などへ運ばれたのです。このような状況が一変したのは中越鉄道の開通によってでした。

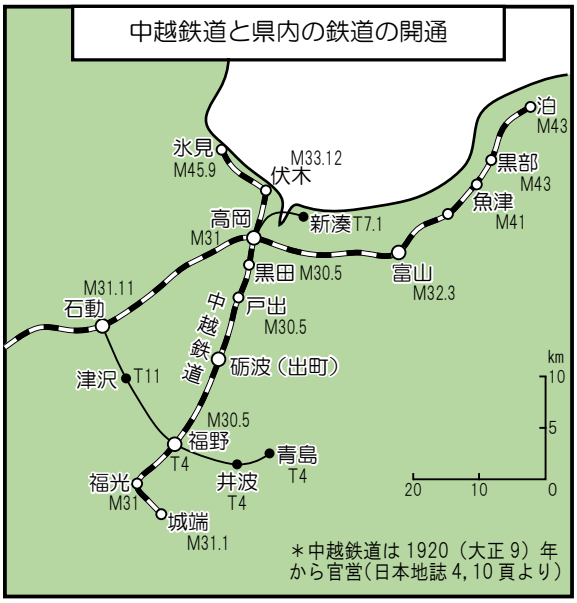
1893年ごろ	（明治 26）	島田孝之（高岡市島新出身）や大矢四郎兵衛（砺波市鷹栖出身）らが中心になって砺波・高岡の有志をつのり、中越鉄道株式会社を設立した。
1896年	（明治 29）	工事が開始された。
1897年	（明治 30）	高岡・城端間が開通（富山県初の鉄道） このころから荷馬車があらわれる。
1900年	（明治 33）	その路線は伏木まで延長され、砺波地方の米が大量に早く伏木港へ運ばれ、伏木港からは石炭や魚肥、塩などが運ばれてきた。
1902年	（明治 35）	出町・石動間に乗合馬車が営業を始める。
1912年ごろ	（大正元）	自動車もあらわれ、乗合自動車の営業や貨物輸送にもあたるようになった。

大矢四郎兵衛

中越弁慶号　（はじめて中越鉄道を走った機関車。砺波市の指定文化財としてチューリップ公園内の車庫に保存されています）



明治時代中ごろの舟運

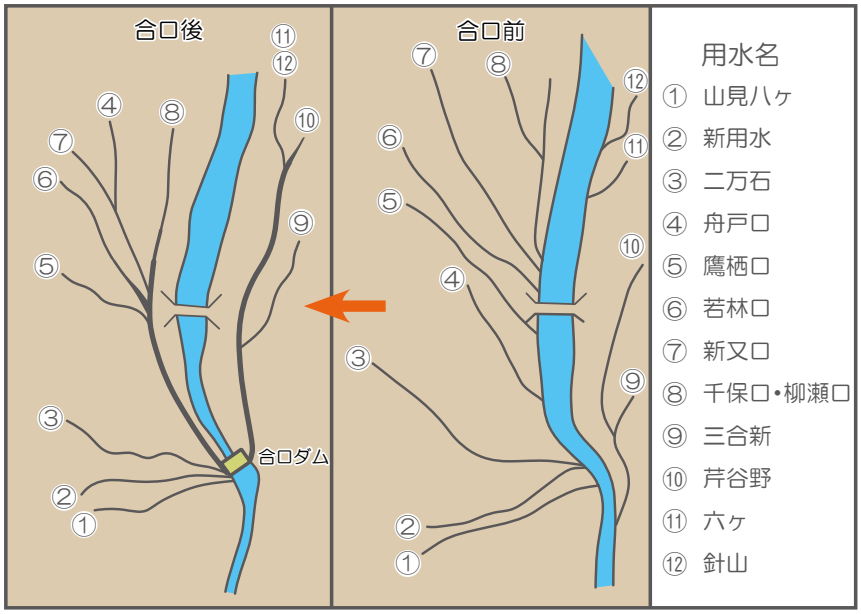


中越鉄道路線図

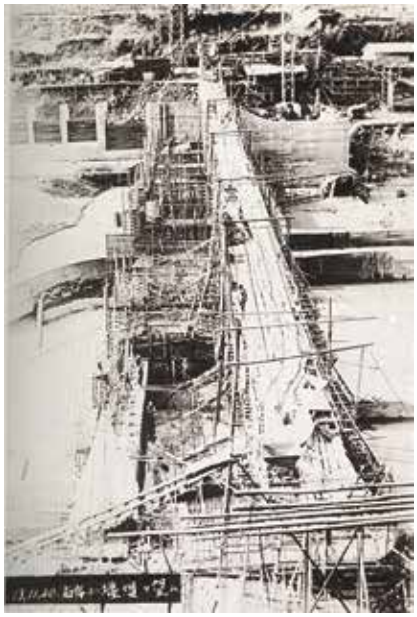
M ･･･ 明治、T ･･･ 大正

用水の合口 －合口ダムの建設－

庄川扇状地では、米づくりに必要な水の大部分を庄川から取り入れています。その取入口は、左岸に舟戸口、鷹栖口、若林口、新又口、千保口・柳瀬口の六用水、右岸には芹谷野、六箇、針山の三用水がありました。このように多くの取入口があると、上流部では水量も豊富で水の取入は容易でしたが、下流部にいくにつれて洪水で川筋が変わったり、取入堰が流されたりし、日照りで水不足になると水の取入れが困難になり、水争いが起こりました。



合口による取入口の移り変わり



合口ダム工事の様子
（昭和 13 年，右岸より）

左岸	かんがい面積7,282町(72.22km²)
取入口名称	二万七千石　舟戸口　鷹栖口　新又口　若林口　千保柳瀬口
用水名称	山見用水　新用水（二万石）　舟戸口　鷹栖口　新又口　若林口　千保柳瀬口
右岸	かんがい面積1,787町(17.72km²)
取入口名称	芹谷野　六ヶ　針山中田
用水名称	芹谷野　三合新　六ヶ　針山　中田

合口に参加した用水路（ダム施工後、山見八ヶ、新用水、示野用水、二万石用水は単独取水となる）

そのため長い間、平等に水の配分が受けられるよう、取入口を一つにすることが議論されてきましたが、上流用水の反対のため、なかなか実現しませんでした。ところが、大正年間に上流に小牧ダムが造られる計画が発表されると、川底がさがり、さらに水の取入が困難になることが予想されたことから、合口ダム建設の機運が一気に高まりました。

1930（昭和 5）年に起工式を行いましたが、戦時中の労力・物資不足に加えて、何度も洪水に見舞われたため工事は困難をきわめ、着工後 14 年を経た 1943（昭和 18）年にようやく完成式を行いました。

庄川合口ダム（舟戸ダム）

5度の戦争、そして敗戦

明治以来富国強兵を目指してきた日本は、**日清・日露戦争**をへて、昭和に入ると、**満州事変**（1931年）、**日中戦争**（1937年）を矢継ぎ早に起こし、ついに1941（昭和16）年、ハワイの真珠湾を攻撃し、**太平洋戦争**へと突入していきました。資源のない小さな日本が、米・英などの世界の国々を相手に戦った、まさに国の命運をかけた戦争でした。

砺波からも働き盛りの若者が次から次へと戦場へ送られました。はじめのうちは村人総出の華々しい見送りを受けましたが、戦争が激化し、長引くようになると次第にひっそりと身内だけに送られるようになりました。

ガソリンが統制され、薪をたいて走る自動車が現れました。また、兵器を作る金属が不足し、鍋・釜をはじめ、お寺の鐘も**供出**（きょうしゅつ）させられました。木造船を作るために、長年にわたって家の回りに植えられていた屋敷林までも供出の対象とされました。松川除の松までも松根油（しょうこんゆ）❶を採るために伐られました。

日本全土の都市が毎日のように空襲を受けるようになると、せめて子供たちだけでも安全なところへ避難させようと、1944（昭和19）年から「**学童疎開**（がくどうそかい）」が行われました。砺波市内へも多くの子供たちが来て、寺院で共同生活をおくりました。

1945（昭和20）年8月2日、富山市中心部が大空襲を受け、火の海となりました❷。同月6日には広島へ、つづいて9日には長崎へ原爆が投下され、ついに8月15日正午、天皇の「玉音放送」で戦争は終わりました。連合国軍に対する無条件降伏という形の敗戦でした。

戦時中の砺波

● 昭和20年8月の庄下村の様子

男子の総人口635名のうち**210名**までが出征しています（約33%）。残る425名の中にも、徴用として遠く舞鶴（京都府）やほかの軍事工場に出ている人は多かったようです。

● 学童疎開の状況　※砺波郷土資料館調べ

旧村名	疎開先	疎開校	生徒数
出町	真光寺	渋谷区・大和田	35
	円光寺	渋谷区・臨川	38
庄下	正行寺	渋谷区・渋谷	40
中野	西照寺	渋谷区・長谷戸	}82 ＋51
	正行寺	〃	＋30
五鹿屋	浄蓮寺	渋谷区・加計塚	40
	祥雲寺	渋谷区・幡代	太田・光圓寺と合わせて79
	正念寺	渋谷区・加計塚	26
東野尻	萬福寺	渋谷区・大和田	123
若林	憶念寺	大森区・久原	30
	願称寺	大森区・久原	100以上
林	常徳寺	渋谷区・山谷	25～26
	宝洲寺	渋谷区・山谷	25～26
高波	真行寺	大森区・東調布第二	35
油田	西方寺	渋谷区・広尾	南般若・光福寺と合わせて100
	大善院	渋谷区・大和田	50
南般若	光福寺	渋谷区・大和田・広尾・臨川	}130
	速恩寺		＋42

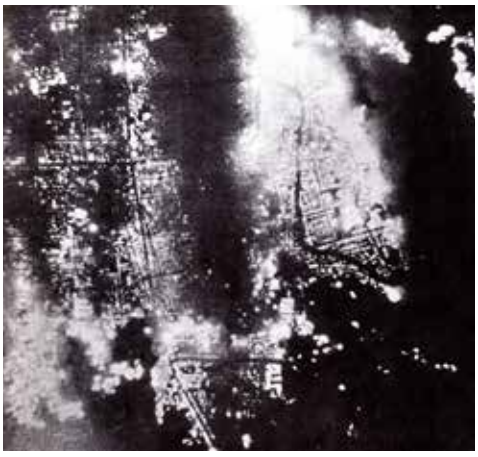
旧村名	疎開先	疎開校	生徒数
南般若	常福寺	渋谷区・大和田	81
柳瀬	萬遊寺	渋谷区・原宿	23
	称名寺	〃	25
太田	専念寺	渋谷区・大和田	64
	光圓寺	渋谷区・幡代	五鹿屋・祥雲寺と合わせて79
般若	浄念寺	渋谷区・西原	20
	常称寺	渋谷区・西原	60
東般若	照円寺	渋谷区・西原	約50
	浄光寺	渋谷区・西原	約40
梅檀野	厳照寺	渋谷区・神宮前	約70＋83
	妙覚寺	渋谷区・神宮前	約30
	浄蓮寺	渋谷区・上原	約20
	千光寺	渋谷区・大和田	約50
山見	西蓮寺	渋谷区・笹塚	}約120
	光照寺	〃	
雄神	西蓮寺	渋谷区・富谷	130
種田	法正寺	渋谷区・千駄ヶ谷	＋26
	宝林寺	〃	}114＋26
	法安寺	〃	＋28

忠魂碑の組み立て作業
（昭和4年，砺波市庄川町金屋）
石材重量約26トン。村民延べ15,870人。

屋敷林の供出（砺波市東保）

学童疎開の子供たち（大窪の常福寺）

❶ 松根油は松の根にたまる油状液体で、航空ガソリンの原料として利用されました。
❷ 富山大空襲は当時の市街地の99.5%を焼失する被害がありました。原子爆弾が投下された広島・長崎を除く地方都市への空襲としては、もっとも大きな被害を受けました。サイパン基地から約170機のB29が来襲し、富山市内約5㎢内に1200トンの焼夷弾・爆弾が投下され、約1万人の死傷者を出しました。



富山大空襲により炎上中の富山市街
（B29から撮影，北日本新聞社提供）

砺波市の歴史を調べてみよう

太平洋戦争

昭和 20 年 4 月光照寺にて撮影（堀幸夫氏の著書より）

学童集団疎開の声

戦時中、東京都渋谷区の笹塚小学校の 5 年生が 1944（昭和 19）年 9 月から翌年 10 月まで現在の砺波市庄川町に集団疎開をしていました。41 名が西蓮寺（さいれんじ）、40 名が光照寺（こうしょうじ）でそれぞれ集団生活を送りました。その内の 1 名の児童の日記を紹介します。

8 月 2 日（木）

夜中、空襲警報が出、爆音も聞こえてきた。ここの上空に来たらしいので、すぐ外へ分散退避をした。三十分位たつと、爆音も聞こえなくなったので、中へ入って寝た。少したつと、浅野君が「火事だ」といってきたので、外へ出てみると、空が赤く染まっていた。村井先生がいらっしゃって「富山市が焼けているのだ」といった。（後略）

8 月 7 日（火）

夜中、又、警報が出た。午前に二十分、庭の草むしりをした。十時頃警報が出たが、すぐ解除になった。昼食の味噌汁にはなすが入っていた。今年になって初めてだ。午後、又、警報が出、爆音がしたので外へでて見ると、B29 が一機飛んでいた。夕食後、青島駅へ、疎開してくる人をお迎へに行った。（後略）

8 月 15 日（水）

十二時に、ラヂオで、恐れ多くも天皇陛下よりの御訓話があったので、皆、聞いた。はっきりと聞こえなかった。（中略）点呼の時、先生が「戦争は一（ひと）まづ終った」とおっしゃった。それは米国が原子爆弾といふのを使用して、広島空襲し、四機で二十万人も殺したからだ。（後略）

（堀　幸夫 2010『少年たちの日々～日記と手紙が語る学童集団疎開～』）

市内の戦争遺跡

般若村分会射撃場跡

般若地区在郷軍人分会では実戦に備え、福山地内の大堤（メルキュール富山砺波リゾート＆スパの横）を利用して射撃場を作り、軍事教練用の実弾射撃場として市内の軍人に提供しました。

今も立つ標柱（砺波市安川）

食糧不足を補うために

庄川の松川除堤防を開墾して大豆や南瓜を育てたり、庄東地区の丘陵部では山林を切り開いて、そば・サツマイモ・馬鈴薯（ばれいしょ）を植えたりしました。

また、朝鮮人を使って安川新（現在の砺波市福山）の堤の土手を高くして溜池兼用の大堤にするなど、食糧を増やすことに努力を払いました。

雄神地下工場跡

太平洋戦争末期、司令部偵察機の地下工場が市内に建設されました。

1944（昭和 19）年 7 月、東条内閣は最後の閣議で、全国に地下壕を掘ることを決定しました。米軍の空爆や上陸作戦を予想し、本土決戦に備えるためです。

三菱第十一航空機製作所は名古屋から工場を疎開し、富山県の大門工場に生産の拠点を移しましたが、空襲に備えてさらに地下へ移すことを計画し、雄神（おがみ）村（現在の砺波市庄川町三谷周辺）に工場を建設することにしました。

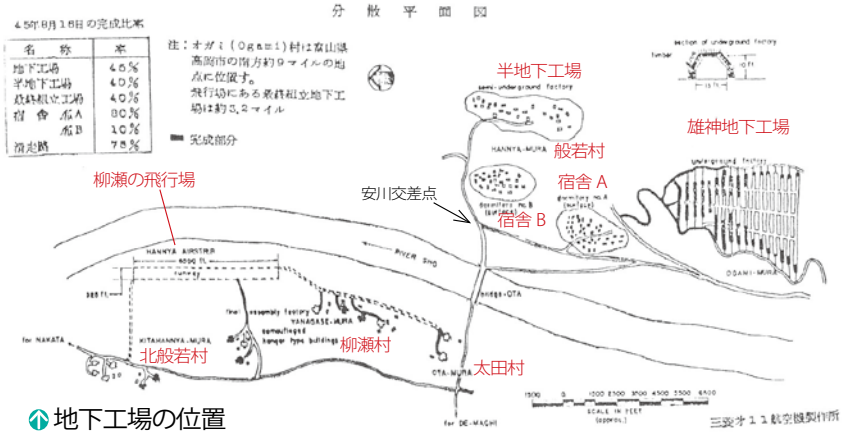
当所の予定は 7,300㎡の範囲に 20 本のトンネルを掘り、機械部門を移して製作加工し、それを柳瀬村（現在の砺波市柳瀬）の最終組立工場へ運搬し、隣接の飛行場で試験飛行を行う計画でした。

建設工事には多くの朝鮮人労働者も投入されました。

最終的には 16 本のトンネルが掘られましたが、機械の搬入は行われることなく終戦を迎えました。

戦時中に極秘に建設されたため、近年まで忘れ去られた存在でした。

現在の地下工場跡の様子



地下工場の位置

（米国戦略爆撃調査報告書（18 巻）掲載の「分散平面図」
松本文雄 2006『司令部偵察機と富山』より）

8 農作業の移り変わり

昭和 30 年代の米作り

砺波平野一年間の農作業

冬

1月

わら仕事

ワラ打ち
縄ない
米俵編み
桟俵編み
ムシロ編み
コモ編み
ミノゴ編み
モッコ編み
ドウワ編み

ツッ（木槌）

2月

3月

株かけ

苗代

種籾浸し

本田

江ざらい

ナワシロ作り

4月

あぜ塗り

種まき

5月

荒起こし
シロカキ
エブリサシ・ハシゴ引き
田植え
オシウエ

苗取り

6月

ラチ打ち
一番ラチ
二番ラチ

田の草取り
ならし
二番草
三番草
取り上げ

夏

7月

8月

アゼ草刈り
田のヒエ抜き

早稲

稲刈り
地干し
脱穀
籾摺り
農協へ出荷

ラチウチキ
（中耕除草機）

9月

中稲・晩稲

稲刈り
地干し（穂干し）
脱穀
籾摺り
農協へ出荷

秋

10月

アゼ豆引き・その脱穀
田んぼ作業のあとしまつ
ネカ（籾殻）のしまつ
ナワシロ用クンタン（燻炭）作り

11月

12月

ナワシロ作り

あぜ塗り

コロガシ

結仲間での田植えの休憩

田植え

地干し

脱穀

籾すり

農具

スキ（双用犂）

カマ（馬鍬）

コロガシ（田植枠）

イネコキキカイ（足踏脱穀機）

トウミ（唐箕）

センゴク（千石）

ドロウス（土臼）

みんなで力を合わせて生きる

圃場整備以前の農作業は、ほとんどが人間の体をかけた重労働でした。そのため「**結い**」と呼ばれる共同作業で隣近所が力を合わせて、田植えをはじめとする農作業をしました。

また、子供も大きな労働力でした。小さな弟・妹の子守りやさまざまな農作業の補助など、毎日の生活に子供の手伝いは欠かせないものでした。

子守りは近所のおねえさん

自然の循環の中で作物を育てる

戦後、次々と新しい農薬や化学肥料、除草剤などが開発され、農作業は戦前とは比較にならないほど省力化され、米の収量も増えました。しかし、新しい薬剤の中には、人間や自然環境に深刻な影響を与えるようになったものもあり、今では使用を禁止されているものもあります。

むかしの米作りでは、雑草やワラを腐らせた推肥、人糞や馬・牛の糞、ワラ灰や木炭なども貴重な肥料となりました。台所から流される生活排水や風呂水なども、穴にためておき、春に肥料として田んぼに撒かれました。

地面に植えられた種は、太陽の光と水、そして土中の栄養分を吸って大きくなります。人間は、その作物を食べて生きています。消化されないものは体の外へ排出されます。それをまた土地に返すことによって作物を育てる大事な栄養となってきました。

このように、米や野菜などの作物は**自然にあるものを最大限に利用すること**によって作られてきたのです。

そのひとつの例に**ワラ**を取り上げてみます。

イネからモミをとると、イネの茎だけが残り、ワラとなります。しかし、ワラはゴミではありません。生活のあらゆるところでさまざまに利用される「**資源**」です。一本のワラは最後まで無駄なく使われ、古くなると土に返され、新たな作物を育てる肥料となりました。

バンドリ

ムシロバタゴ

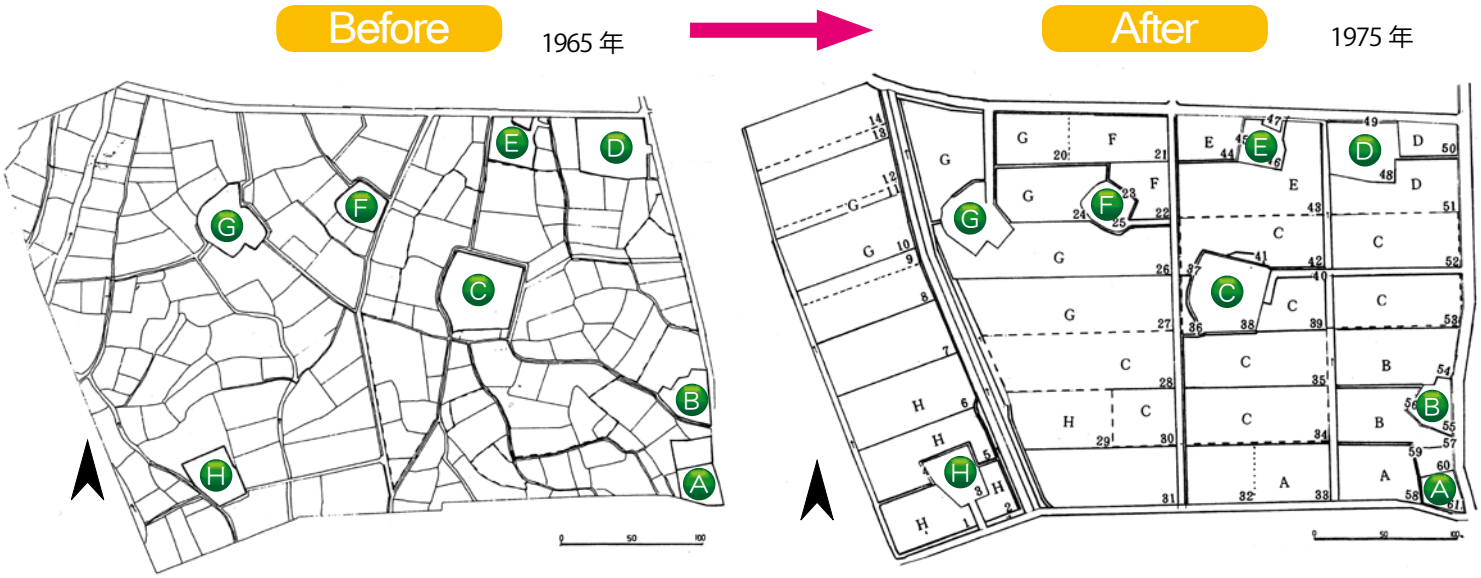
ムシロ編みの他にカマスやコモ編みにも使われた。

ナワテンゴ

ワラジ

ワラの利用サイクル

ミノゴ



圃場整備前と後のようす（砺波市小島）

圃場整備による変化

昭和 30 年代後半から日本各地で**圃場整備**（ほじょうせいび）が行われました。富山県では、1962（昭和 37）年の東野尻西部地区が最初でした。

圃場整備により農村の景観は大きく変わりました。まず、それまで地形に合わせて曲がりくねっていた川や道、田んぼの形が直線になりました。田んぼ一枚が大きく整形され、一定の大きさになったのです。長辺 100 ～ 150 m、短辺 30 ～ 40 m、面積 30 ～ 40 a の大型水田です。

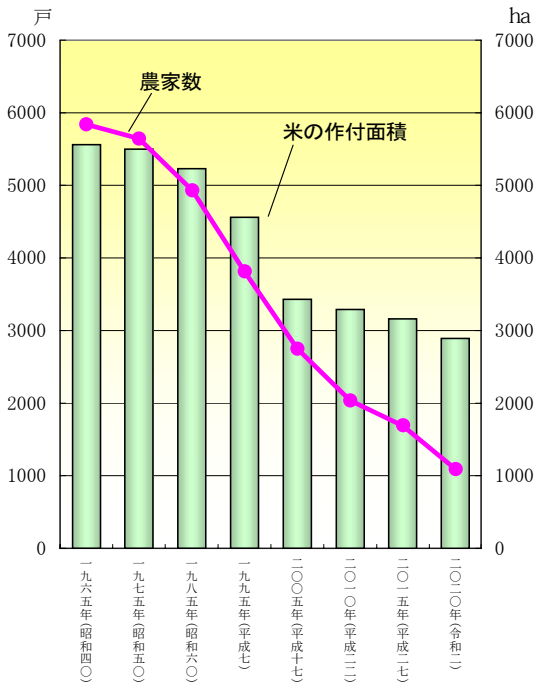
また、用水と排水が分離されました。一方に用水路と道路、反対側に排水路が作られ、水の管理が容易になりました。漏水を防ぐために、用排水には三方コンクリートの U 字溝が使われました。

巨額の費用を投入して 24 年間という長い歳月をかけて圃場整備が進められた結果、農業の機械化が著しく進みました。田の荒起こし・代かき作業は、動力耕耘機に代わりトラクターでできるようになりました。田植えは、共同の手植えから田植機となりました。収穫作業では、手刈り、脱穀機による作業が、コンバインにとって代わり、もみの乾燥も地干しから乾燥機へと代わりました。

こうして効率のよい農業生産ができるようになったのに、今日では、国民の食生活の変化もあり米の生産過剰が深刻な問題となっています。1970（昭和 45）年から米の生産調整である**減反政策**（げんたん）が行われ、さらに、1978（昭和 53）年からは転作の割当制度が開始されました。今では耕地の約 30 パーセントに転作が余儀なくされ、主に大麦や大豆・里芋などが植えられています。

大型機械の導入により、農作業は休日だけでもできるようになったことから、農家の兼業化がいっそう進みました。近年では、請負耕作の業者や営農組合などへ委託して、農村地帯に住んでいても農業をしない家も見られるようになりました。

砺波市の農家数と米の作付面積の推移



洪水と地震

自然災害は、暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火などがありますが、ここでは洪水と地震についてみていきます。

1772（明和９）年の洪水

（国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所「河川の歴史読本 庄川」より）

洪　水

庄川の洪水は、古い記録では 1406（応永 13）年にさかのぼります。江戸時代には記録が残るだけでも 139 回、1868（明治元）年から最後の洪水といわれる 1948（昭和 23）年までの間は 38 回を数えます。とりわけ江戸時代以降では 1772（明和 9）年、1896（明治 29）年、1934（昭和 9）年の被害が大きかったといわれます。洪水は地震だけでなく、集中豪雨や雪どけ水が原因で発生することがあるので、**避難施設**や**ハザードマップ**を確認するなど日頃からの備えが必要です。

「砺波市洪水ハザードマップ」を検索して、自宅を確認してみよう！

庄川で発生した洪水の年表

発生西暦	発生和暦	出来事
1406	応永 13	洪水により雄神川(庄川)の流路が変わる
1586	天正 13	金屋の東の山が崩れ、川を堰き止め、20日後に流れ出た水で今の川筋ができる。
1772	明和 9	雪どけ水で増水し、松川除を破壊。この時、元の千保川が本流となる。
1831	天保 2	松川除が大破
1896	明治 29	千保川に水が溢れ、下流の高岡市が大きな被害を受ける。
1934	昭和 9	大雨で増水した水が堤防を５ヶ所破壊

地　震

富山県では、過去に 14 回の地震が記録されています。

特に天正地震では、土石流によって庄川の川筋が現在の位置に変わりました。また、**御館山館跡**（砺波市高波）では、発掘調査で液状化現象・断層・地割れといった地震の痕跡がみつかりました。年代測定の結果、10 世紀、16 世紀（天正地震）、19 世紀（安政地震）の 3 度の地震の痕跡だとわかりました。また 2024（令和 6）年 1 月 1 日に発生した、令和 6 年能登半島地震では、砺波市で震度 5 弱を観測し、住宅の倒壊等の被害が出ました。砺波市では、過去に大地震が起こっていますし、地震を引き起こす**活断層**（砺波平野断層帯東部）が存在します。砺波地方でも地震は、いつ起こってもおかしくないものであり、決して遠い存在ではないのです。

「砺波市地震防災マップ（揺れやすさマップ）」を検索して自宅を確認してみよう！

富山県の活断層

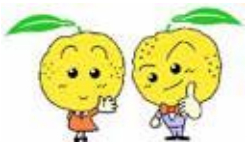
（公益財団法人とやま国際センター「防災情報 in 富山」より）
http://www.tic-toyama.or.jp/bousai/saigai/saigai-01.html

発生西暦	発生和暦	地震の名称（地域）	県内での主な被害	最大震度
863年７月10日	貞観５年	(越中・越後)	山崩れ、住宅損壊、圧死者多数	不明
1586年１月18日	天正13年	天正地震（東海・北陸他）	木舟城が崩壊、圧死者多数	5
1858年４月９日	安政５年	飛越地震（飛騨・越中・加賀・越前）	常願寺川の上流が堰き止められ、後に決壊して、死者140名、家屋倒壊及び流出1,612棟、旧大山町で山崩れにより死者36名	6
1891年10月28日	明治24年	濃尾地震	越中で家屋全壊２棟	4
1930年10月17日	昭和５年	(大聖寺付近)	高岡市で死者１名	5
1933年９月21日	昭和８年	(能登半島)	負傷者２名	4
2007年３月25日	平成19年	平成19年能登半島地震	負傷者13名	5弱
2007年７月16日	平成 19年	平成19年新潟県中越沖地震	負傷者１名	3
2011年３月11日	平成23年	東北地方太平洋沖地震		3
2014年11月22日	平成 26年	長野県北部地震		3
2023年５月５日	令和５年	令和５年能登半島沖の地震	負傷者１名	4
2024年１月１日	令和６年	令和６年能登半島地震	負傷者54名、 家屋の被害(全壊255棟、半壊783棟、一部損壊20,174棟)、18,937戸の断水、 液状化による道路の陥没、隆起、家屋への被害多数。	5強

富山県の地震年表

御館山館跡の発掘断面でみつかった地震痕跡

1　砺波市のまちづくり



砺波市では、「第２次砺波市総合計画」に基づいて各種施策を行っています。下の事業は、令和６年度のものです。主な施策は、毎年４月号の「広報となみ」に掲載されるので、確認してみましょう。

資料１　10WAVE（テンウェーブ）プロジェクト（令和６年度）

WAVE１　つなぐ
子育て応援プロジェクト
- ●私立保育施設園外保育支援事業
- ●新生児出産サポート事業
- ●産後もママ安心事業

WAVE２　拓く
質の高い学びプロジェクト
- ●海外留学支援奨学資金給付事業
- ●心の教室相談員の追加配置事業
- ●庄川水資料展示事業

WAVE３　支える
健康づくりプロジェクト
- ●緩和ケア病棟転換改修工事（病院事業会計）
- ●内視鏡手術支援ロボット更新（病院事業会計）
- ●家庭血圧測定普及啓発事業（国民健康保険事業特別会計）

WAVE４　選ばれる
となみ（1073）暮らし応援プロジェクト
- ●住宅取得支援事業、家賃支援事業
- ●結婚新生活支援事業
- ●移住・定住引越し支援事業

WAVE５　魅せる
情報発信プロジェクト
- ●となみシティプロモーション映像配信事業
- ●ＲＰＡ導入事業
- ●首都圏・関西誘客事業

WAVE６　備える
地域防災力プロジェクト
- ●「防災となみ」改訂・英語版作成事業
- ●地区防災計画策定促進事業
- ●クマ被害防止対策事業・狩猟免許取得支援

WAVE７　活かす
生活基盤等マネジメントプロジェクト
- ●野球場スコアボード改修工事
- ●上中野配水場電機室更新詳細設計（水道事業会計）
- ●砺波チューリップ公園再整備事業

WAVE８　結ぶ
地域公共交通プロジェクト
- ●チョイソコとなみ運行事業
- ●市営バス路線最適化
- ●城端線・氷見線活性化調査等事業

WAVE９　稼ぐ
産業振興プロジェクト
- ●商工業振興支援事業
- ●となみブランド推進事業
- ●工業団地造成事業（工業団地造成事業特別会計）

WAVE１０　受け継ぐ
循環型社会プロジェクト
- ●公用車ＥＶ導入事業
- ●地球温暖化対策実行計画（区域施策編）策定
- ●公共施設への再生可能エネルギー導入ポテンシャル調査

LET'S WORK 11

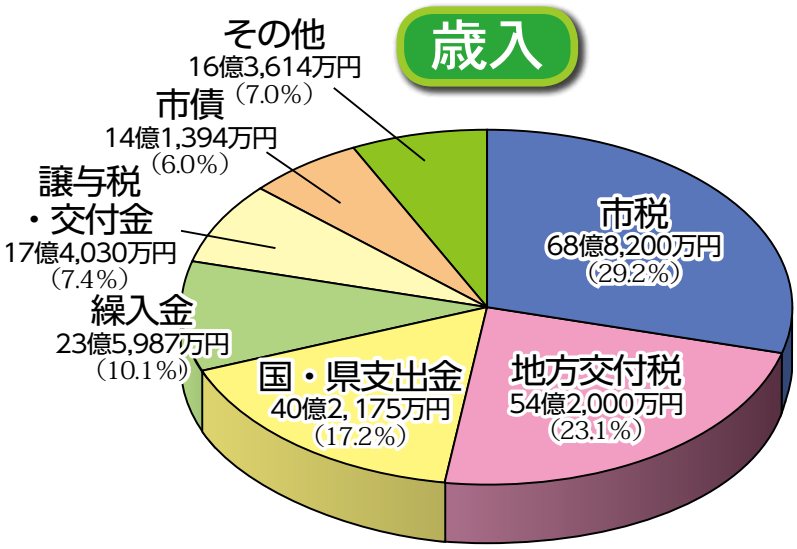
砺波市が行う事業にはどのような特色があるのだろう。

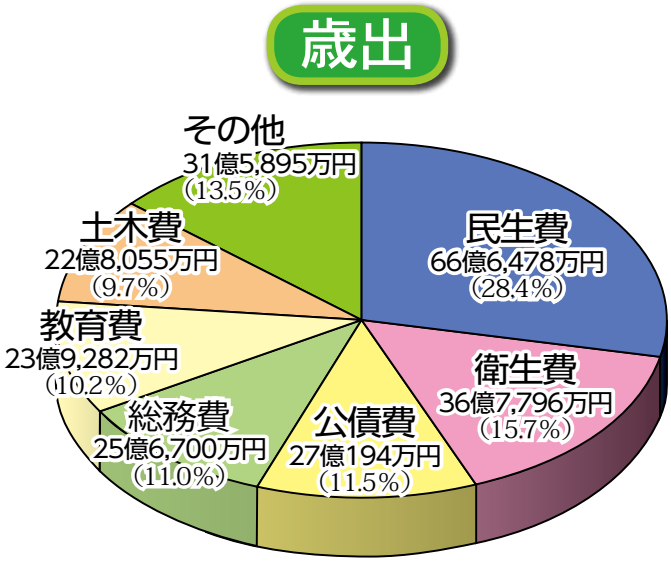
資料２ 砺波市の予算（令和６年度）

一般会計 **234 億 4,400 万円**

歳入

市税
市民税や固定資産税、たばこ税等
地方交付税
一定水準の行政サービスを保障するため、国から入るお金
国・県支出金
国・県から入る補助金
（すべての使い道が特定）
繰入金
基金から取り崩すお金
譲与税・交付金
地方譲与税や地方消費税交付金等
市債
公共事業の財源とするための長期借入金
その他
使用料や手数料、諸収入等





歳出

民生費
高齢者や子育て等の福祉サービス
衛生費
ごみ処理や市民の健康管理
公債費
過去に借り入れた市債の返済
総務費
まちづくりや人件費、一般事務等
教育費
学校教育や社会教育、スポーツ振興等
土木費
道路や公園、河川の整備等
その他
商工業、観光、農林水産、消防、議会等

LET'S WORK 12

歳入と歳出、それぞれ多いものから３つ書き出してみましょう。

歳　入	①	②	③
歳　出	①	②	③

2　少子高齢社会と砺波市

「**少子高齢社会**」という言葉がよく聞かれるようになってきました。人口の高齢化について、砺波市の現状はどうなっているのでしょうか。また、そのような中での家族の在り方、高齢者福祉の在り方はどうあればよいのでしょうか。

砺波市の人口の高齢化の現状について調べてみましょう

資料１　年齢別人口構成

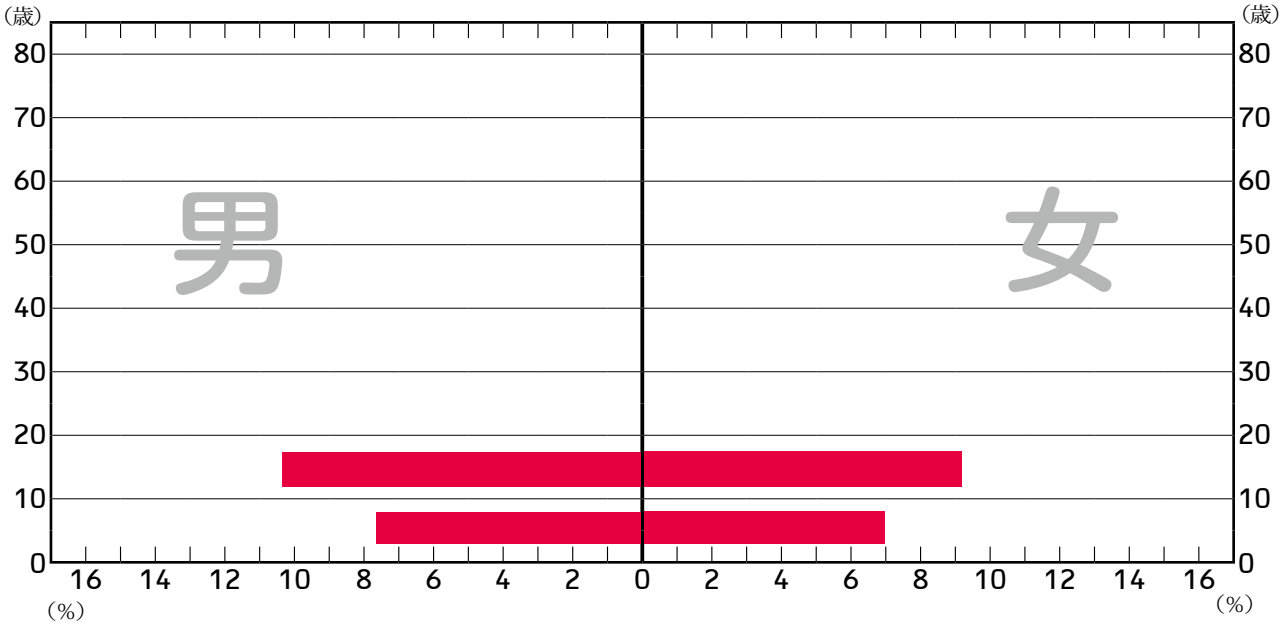
年　齢	総　数	男	女	構成比（%）		
				総　数	男	女
総　数	46,743	22,805	23,938	100.0	100.0	100.0
0～ 9	3,233	1,665	1,568	6.92	7.30	6.55
10～19	4,330	2,239	2,091	9.26	9.82	8.74
20～29	4,649	2,415	2,234	9.95	10.59	9.33
30～39	4,474	2,362	2,112	9.57	10.36	8.82
40～49	6,289	3,251	3,038	13.46	14.25	12.69
50～59	6,820	3,381	3,439	14.59	14.83	14.37
60～69	5,452	2,657	2,795	11.66	11.65	11.68
70～79	6,574	3,133	3,441	14.06	13.74	14.37
80歳以上	4,922	1,702	3,220	10.53	7.46	13.45

参考：年齢別人口の月別推移（令和6年8月31日現在）

LET'S WORK 13

資料１を参考にして、資料２を完成させよう。

資料２　年齢別人口構成（人口ピラミッド）



少子高齢社会における家族の在り方や福祉の在り方について考えましょう。

資料３　高齢化の状況

項目 年次	総人口 （人）	世帯数 （世帯）	65 歳以上 （人）	市高齢化率 （%）	県高齢化率 （%）	国高齢化率 （%）
平成 21 年	49,336	15,120	11,686	23.7	25.9	22.7
22	49,313	15,226	11,896	24.1	26.2	23.0
23	49,452	15,423	11,888	24.0	26.4	23.3
24	49,303	15,545	12,181	24.3	27.5	24.1
25	49,877	16,022	12,693	25.1	28.7	25.0
26	49,588	16,121	13,099	26.1	29.7	26.0
27	49,292	16,202	13,474	27.9	30.5	26.6
28	49,272	16,481	13,770	28.4	31.1	27.3
29	49,073	16,698	13,962	29.1	31.6	27.7
30	48,659	16,739	14,145	29.3	31.9	28.1
31／令和元年	48,509	16,970	14,287	29.6	32.3	28.4
令和２年	48,244	17,135	14,348	29.7	32.8	28.8
3	47,875	17,303	14,449	30.2	33.1	28.9
4	47,447	17,320	14,420	30.4	33.2	29.0
5	47,236	17,547	14,339	30.4	33.3	29.1

＊高齢化率＝65歳以上の人口／総人口　※参考「人口に関する各種集計」

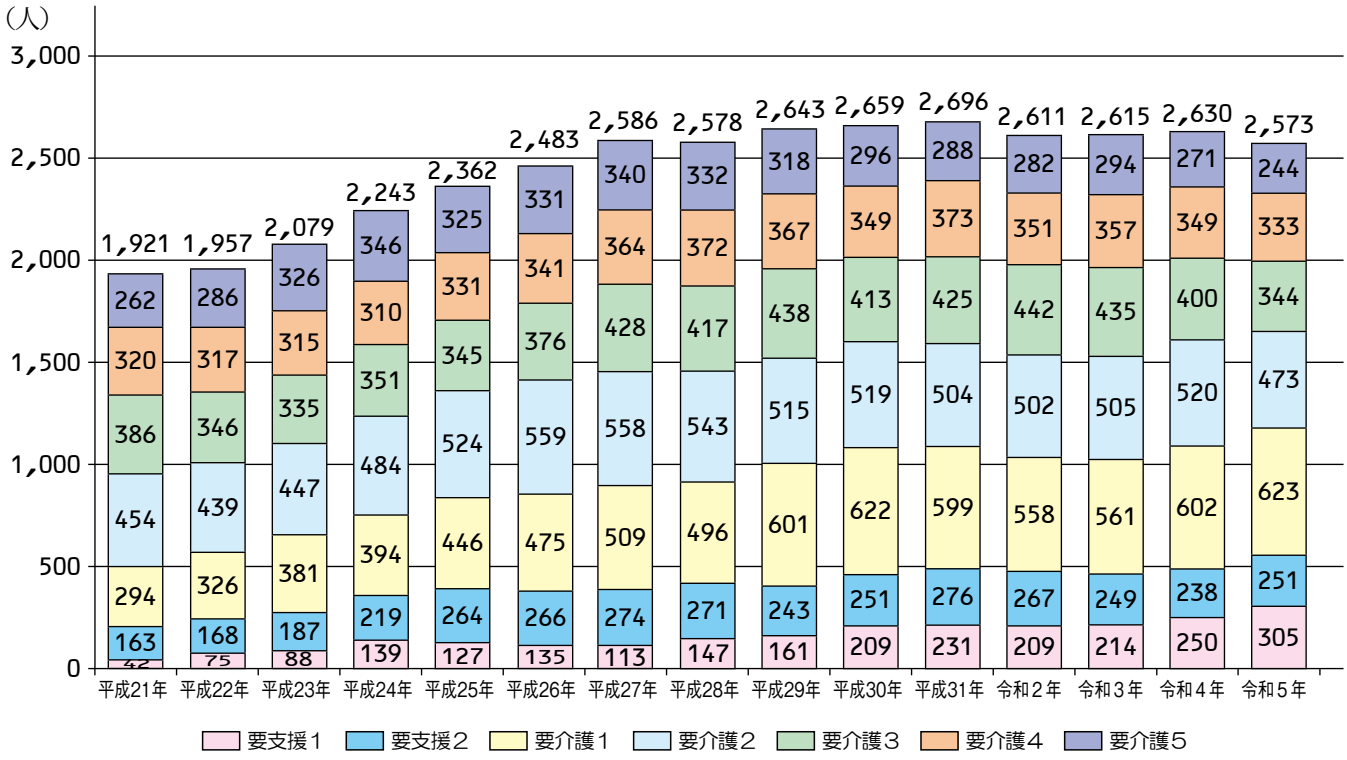
※ 国・県の高齢化率は「高齢福祉対策関係資料」（県 HP）、「高齢社会白書」（内閣府）にもとづく。

LET'S WORK 14

砺波市の高齢化の現状には、どのような特色があるのだろう。

資料４　介護保険認定者の推移

各年３月末日現在



砺波市高齢者保険福祉計画（第８期計画）

※　要介護状態の区分

要介護状態区分	状態のめやす
非該当	要支援や要介護に当てはまらない人
要支援１	ほぼ自立した生活ができるが、介護予防のための支援や改善が必要
要支援２	日常生活に支援は必要だが、それによって介護予防できる可能性が高い
要介護１	歩行などに不安定さがあり、日常生活に部分的な介護が必要
要介護２	歩行などが不安定で、排せつや入浴などの一部または全部に介護が必要
要介護３	歩行や排せつ、入浴、衣服の着脱などに、ほぼ全面的な介護が必要
要介護４	日常生活全般に動作能力が低下しており、介護なしでの生活は困難
要介護５	生活全般に介護が必要で、介護なしでは日常生活がほぼ不可能

LET'S WORK 15

少子高齢社会を迎えて、以下のことを考えてみましょう。

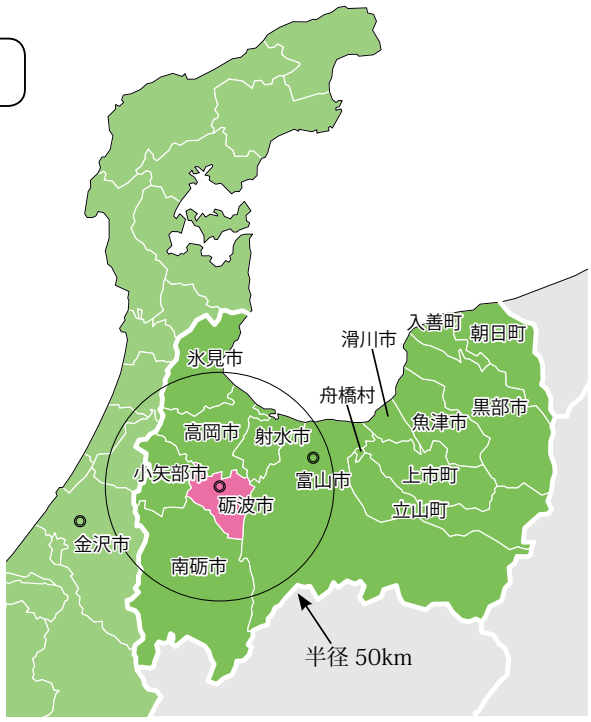
Q1　あなたは、自分が年老いてだれかに身の回りの世話をしてもらわなければならなくなったとき、だれに世話をしてもらいたいと思いますか。また、それはなぜですか。

Q2　あなたは、自分の親の体が不自由になったとき、だれが世話をすればよいと思いますか。また、それはなぜですか。

Q3　あなたは、高齢者の方へどんな福祉サービスや民間のボランティア活動があればよいと思いますか。

〔中学校社会科副読本〕

学習の手引き　郷土砺波　解答例



LET'S WORK 1（P5）

（解答）右の図を参照のこと。

LET'S WORK 2（P6）

（解答例）出町

21 地区の中で人口、世帯数ともに最も多い。JR 砺波駅周辺の商店街や郊外の大型ショッピングセンターなど商業が発達し、市街地が広がっている。毎年、チューリップ公園を中心に開催されるチューリップフェアには県内外や海外からの観光客も多く、観光地として有名である。また、伝統的な祭りの継承にも力が入れられ、2009（平成 21）年には出町子供歌舞伎曳山会館が開館した。

LET'S WORK 3（P7）

（解答）①ソウル、大連、ウラジオストク　②略

LET'S WORK 4（P8）

（解答）①略　②砺波市の気候が浜松の気候と大きく異なる点は、冬の降水量が多い点である。これは冬の湿った季節風が日本海から吹きつけ、山地にぶつかり日本海側の北陸地方に多くの雪や雨などを降らせるからである。これに対し、山地をへだてた東海地方には乾いた空気が流れ込み、冬でも晴れの日が多い。

LET'S WORK 5（P9）

（解答）加賀藩は瑞龍寺や高岡町、砺波平野を水害から守るため、1670（寛文 10）年から千保川をはじめ、今まで西に流れていた何本もの川を締め切って東へ移し、一本化する工事を始めた。堤防は長さ 2 km にもわたり、45 年の歳月と労力を費やして、1714（正徳 4）年に完成した。その後も補強工事が続けられ、堤防の根固めのために松の木が数百本植えられたことから「松川除（まつかわよけ・まつがいけ）」と呼ばれるようになった。

※川除＝堤防のこと

LET'S WORK 6（P10）

（解答）略

LET'S WORK 7（P11）

（解答）A. ⑤ゆず　B. ②大門そうめん　C. ①チューリップ球根
D. ③三助焼　E. ④挽物木地　F. ⑦里いも

LET'S WORK 8（P14）

（解答）松原遺跡は縄文時代中期の遺跡だが、この時期は 1 万年以上続く縄文時代の中でもっとも遺跡数が多く、人口が増加した時代である。松原遺跡から土器が多量に出土するのは人口増との関連が考えられる。また、松原遺跡の土器は量もさることながら、完形の土器が多い。これは集団移住か疫病などにより集落が壊滅的打撃を受けて、土器が残された可能性が考えられる。

LET'S WORK 9（P15）

（解答）打製石斧は縄文時代においてもっとも普遍的に使用された石器である。この石器は土の耕起や穴掘りとして使われたが、久泉遺跡ではヤマイモやユリなどの根茎類の植物を採集するために使われたとみられる。遺跡から無数の穴が発掘されたからである。おそらく打製石斧には木製の柄を装着せずに、シャベルのように手で持って使用したと考えられる。

LET'S WORK 10（P16）

（解答）石粟荘、伊加流伎（伊加留岐村）、井山荘があったとされる現在の庄東地区の平野部には、荘園が作られる 8 世紀中頃より古い遺跡が少ない。つまり、それ以前にはほとんど開発の手が及んでいなかったことを示している。荘園が作られた背景には、庄東地区が未開の地であったことが大きな要因と考えられる。また、この土地は低い段丘であるため、庄川による洪水の影響が少ないことも選地の理由のひとつと考えられる。

LET'S WORK 11（P33）

（解答）略

LET'S WORK 12（P34）

（解答）歳入　①市税　②地方交付税　③国・県支出金
歳出　①民生費　②衛生費　③公債費

LET'S WORK 13（P35）

（解答）略

LET'S WORK 14（P36）

（解答）高齢化が少しずつ進んではいるが、県内の他の市町村と比べると低い水準である。

LET'S WORK 15（P37）

（解答）①略　②略　③略

郷土を知るための施設

千光寺	砺波市芹谷 1111	0763（37）0072
となみ散居村ミュージアム	砺波市太郎丸 80	0763（34）7180
砺波郷土資料館	砺波市花園町 1-78	0763（32）2339
砺波市埋蔵文化財センター	砺波市頼成 566	0763（37）1303
砺波民具展示室	砺波市頼成 566	080－1951－4177
砺波市出町子供歌舞伎曳山会館	砺波市出町中央 5-4	0763（32）7075
かいにょ苑（旧金岡家住宅）	砺波市豊町一丁目２-10	0763（33）6934
砺波市美術館	砺波市高道 145-1	0763（32）1001
チューリップ四季彩館	砺波市中村 100-1	0763（33）7716

参考文献

北日本新聞社	1989.6	『写真集 富山県 100 年』
庄川町老人クラブ連合会	1995.7	『写真集 ふるさとのあゆみ・庄川町』
庄川町教育センター	2002.2	『郷土学習の手引き　庄川』
砺波市	2024.3	『統計となみ』（令和５年度版）
砺波市教育センター	2019.3	『学習の手引き　郷土砺波』
砺波市教育センター	2022.3	『学習の手引き　郷土砺波』
砺波市史編纂委員会	1990.3	『砺波市史　資料編１　考古、古代・中世』
砺波市教育委員会	2007.3	『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』
富山市科学博物館	2007.7	『とやま・サイエンスガイド』

資料協力

北日本新聞社　倶利伽羅不動尊　帝国書院編集部　砺波郷土資料館
砺波散村地域研究所　砺波農地林務センター　砺波市役所　砺波図書館
富山県教育委員会　富山県埋蔵文化財センター　富山市科学博物館
農林水産省北陸農政局西北陸土地改良調査管理事務所

P.1 に掲載の空中写真は、農林水産省北陸農政局西北陸土地改良調査管理事務所の撮影（平成 14 年９月１日）を、許可を得て複製したものである。

学習の手引き「郷土砺波」編集委員

編集委員長　**岩滝　修二**（出町中教頭）
編 集 委 員　**寺松　　優**（庄川中教諭）
　　石田　雄大（庄西中教諭）
執 筆 協 力　**安ヵ川恵子**（砺波郷土資料館）
　　野原　大輔（砺波市教育委員会生涯学習・スポーツ課）

砺波市教育センター

所　　長　**川合　直美**
主　　幹　**片岸　初雄**

中学校 社会科副読本
学習の手引き　郷土砺波
発　行　日　令和７年４月　第８版発行
編集・発行　砺波市教育センター
印刷・製本　アカマツ印刷

上空から見た増山城

氏　名	